

II ヒアリング調査の結果

1 児童養護施設等に入所している子ども

実施期間：平成29(2017)年7月

実施場所：市内児童養護施設

実施対象：5人（小学生～高校生）／男3人、女2人

調査方法：個別面談で実施。1人20～30分の聴き取り

川崎市子どもの権利委員会による児童養護施設等に入所している子どもへのヒアリング調査は、今回が6回目である。

市内には4か所の児童養護施設があり、保護者がいない、虐待されているなどの様々な理由で環境上養護を必要とする子ども約150人が入所して生活している。今回は市内の児童養護施設1か所においてヒアリング調査を実施した。(1)子どもの興味・関心、楽しみ、(2)子どもの居場所、(3)子どもの不安、悩み及び相談、(4)子どもの権利条例の認知度、(5)子どもの参加・意見表明、(6)子どもの自己肯定感等について、質問シートを作成し、個別に聴き取りを行った。これにより施設に入所している子どもの生活の実際や意識が確認できた。

(1) 子どもの興味・関心、楽しみ

最近、夢中になっていること、楽しみにしていることは何かとの質問に対しては、5人中、ゲームを挙げた子どもが2人いた(ゲーム(マリオメーカー)、RPG系のゲーム)、そのほかには、野球、吹奏楽、美術(漫画)などの部活動、ハンドスピナーやドラマにはまっているとの回答もあった。旅行(釣り堀や海水浴など)に行くのが楽しみと答えた子どもいる。

(2) 子どもの居場所

最近、一番居心地がよい場所はどこか、どうしてそう感じるのかとの質問に対し、施設の自分のベッド(タオルケット・ぬいぐるみと一緒に)、トイレ、自分の部屋との回答のほか、施設の外の森、1人でカフェにいるとき、との回答があった。

前者の理由としては一人になれて落ち着ける、ほっとできるというものであり、後者の理由としては、施設では他人がいることや狭さなどの物理的な制約やその他の様々な制約があるためという理由が挙げられた。居場所といえるものはあまりないとの回答も1人あった。

(3) 子どもの不安、悩み及び相談

ア 不安や悩み

心配したり、悩んでいることは何かとの質問に対し、勉強に関することを挙げた子どもが3人、特にないと答えた子どもが2人であった。

前者の3人の勉強に関する悩みの内訳としては、目の前の夏休みの宿題、部活との両立の悩み、受験などが挙げられた。特にないと答えたうちの1人についても、その理由が赤点をとらない成績だからという理由が挙げられており、勉強に関係している。

イ 相談相手

次に、心配したり、悩んでいるときにどうするか、誰か（どこか）に相談するかとの質問に対し、最も多かった回答は、施設の職員であり、4人の子どもから挙げられた。残りの1人は施設の職員には相談しない、特に友人にも話さず自分で解決するとの回答であった。

学校の先生が相談相手と答えたのは1人のみであった。その1人も積極的な相談相手としての回答ではなかった。

ウ 相談機関

知っている相談機関は何かとの質問に対し、「24時間子供SOSダイヤル」(2人)、「こども家庭支援センター」(2人)、「人権オンブズパーソン」(1人)が挙げられたが、5人のうち、2人は知っているものはないと答えた。児童相談所は誰からも挙げられなかった。

また、実際に利用したことのある相談機関はどこかの質問に対しても、「こども家庭支援センター」を1人が挙げたのみである。

相談カードを配布されたことがあるかとの質問に対し、5人のうち、2人が「配られた」と回答した。

しかしながら、配布の際の説明については、配布されたと答えた2人のうち、1人しか説明を受けていない。さらに、実際に相談しようと思ったかとの質問に対しては、ほぼ全員が否定的な回答をしている。

(4) 子どもの権利条例の認知度

条例リーフレットを見たことがあるかとの質問に対して、あると答えたのは、1人だけであった。

権利条例を知っているかとの質問に対して、知っていると答えたのは、同じく1人だけであった。

しかし、いずれも特に内容については、よく知らされておらず、内容の説明に対しては初めて聞くことで「ふーん」という感じであった。「今の世の中では、(子どもの権利が守られていない状況を)やむをえない」との回答があった。

(5) 子どもの参加・意見表明

ア 子どもの参加

地域のイベントや、行事への参加については、内容によるが、いずれも関心を示し

た。

実際にイベントに参加しているかとの質問に対して、5人中4人が参加していると回答した。

具体的には、町内会でのディズニーランド、よみうりランドへ旅行、運動会、おみこし担ぎ、ボーリング、もちつきなどが挙げられた。今は知り合いがいないので参加していないが花火大会など大きなイベントがあれば参加するとの回答もあった（1人）。

イ 子どもの意見表明

誰かに言いたいこと、伝えたいことはないかとの質問に対しては、全員が「ない」と回答した。誰にでも言えているから（1人）という理由の一方で、「（自分は）冷めているから」との回答（1人）もあった。

学校や施設に意見や要望を言える仕組みがあるか、利用したことがあるかとの質問に対し、施設においては、施設内の子ども会議の仕組みがあり、そこで話しているとの回答が5人中4人からあった（残りの1人の子どもはバイト等で時間が合わずそのシステムが利用できないとの回答）。職員には直接言えている、意見箱もあるとの回答も1人いた。

学校に関しては、そもそもそのような仕組みがあると考えている子どもは一人もいなかった。

また、実際に意見を言える仕組みを利用した子どもたちは、お風呂の順番、調理デーで何を作るか、何を食べたいか等の希望を出して話し合ったことなどを具体例として挙げていた。

（6）子どもの自己肯定感等

ア 自己肯定感

まず、自分が好きかとの質問については、「好き」（どちらかというとき好き、を含む）との回答が5人中4人、「好きではない」との回答が1人であった。

好きと回答する理由として、「自分がこういうことができるんだと思える（とき）」「（好きな）スポーツで真剣になることができる（とき）」「好きな子どもと一緒にいるとき」などが挙げられた。

一方、「好きではない」との回答の理由については、「自分の秀でているところがわからない。特徴がない。卑屈とか嫌いなどがいろいろある」などと挙げられた。

次に、親や周りのおとなに大切にされているかとの質問に対しては、5人中4人が「大切にされていると思う」と回答した。その理由というよりも、そう感じるときは「話を聞いてくれるとき」「一緒に考えてくれるとき」であるとの回答であった。それゆえ、話をきちんと聞いてくれていない、反応が悪いときなどは大切にされているとは思えないとの回答が挙げられた。離れている親が心配してくれているとの伝聞から自分が大切にされていると感じるとの回答もあった。他方、「大切にされていると思わない」「わからない」との回答も1人からあった。

また、友だちに大切にされているかとの質問に対しては、「そう思う」との回答が5人中4人であり、友人がいないから「わからない」との回答が1人であった。

「そう思う」との理由については、「(遊びを)一緒にやろうと誘われる(とき)」「みんなが集まってくる(とき)」「話を聞いてくれる。相談したいというときちゃんと聞いてくれる」「わからないとき、悩んでいるとき相談にのってくれる」等の回答があった。他方、「大切にされていると思わない」「わからない」との回答の理由については、「友人がそんなにいないからわからない」との回答であった。

最後に、毎日が楽しいかとの質問に対しては、5人中4人が「楽しい」、1人が「可もなく不可もなく」と回答している。

楽しい理由については、「友だちと一緒に話していると楽しい」「友だちと外に遊びに行ったりすることが楽しい」「ゲームや遊びができて楽しい」といった回答があった。

一方、楽しくない理由については、「楽しみにしていることは特にない」といった回答があった。

イ 自信のあること、得意なこと

自信のあること、得意なことは何かとの質問に対しては、5人中4人が得意なことを挙げた。卓球(施設での教室)、お菓子をつくること(プリン、ガトーショコラ、チーズケーキ、クッキー、シュークリームなど天才と思えるほどなんでもつくる)、スポーツ全般(特に卓球)、体育・理科(特に実験)等、様々挙げた。他方、「何もない」との回答した1人は、得意といえるものはなく、勉強はみんな嫌いとの回答した。

ウ 将来の夢

警察官、パティシエ、保育士、特に決まっていない、特にない(現実に就職活動中)との回答であった。

(7) 川崎市子どもの権利委員会によるまとめ

まず、子どもの権利条例の周知、相談機関、地域のイベント等の質問を通じ、見えてくるものは、子どもの環境を整えるべき大人側の努力が未だ十分でないことである。大人側が積極的に情報を提供していくことで、子どもの主体性は変わってくる。

このことは、地域のイベントなどの情報を積極的に流して参加を呼び掛けたり、施設の中で職員が一人一人に関心をもって話しかけたり相談にのっているという大人の姿勢が顕著な事例には、子どもたちは、それをうれしそうに語っている姿に表れている。その逆は、言わずもがなである。

子どもの安心を実現するために川崎市の大人はこれだけ真剣に環境を作っていこうとしているんだということをもっと子どもたちに、目に見える形で示していかなければならないだろう。

次に、居場所、自己肯定感、自信についてあえてまとめて感想を述べる。ヒアリングを担当した者としては、かなり楽しい雰囲気の中で会話をしていたように思えるが、内容は興味深いものであった。

居場所があると答えた子どもも、実際それが居場所なのかと疑問が持たれる場所であった。本当の意味で安心していただける場所はなくそれを皆が求めていた。気持ちはいつも緊張している、ハイな状況を保とうとしているように思えた。自己肯定感についても同じである。好きでないと答え続けた子どものケアは重要である。しかし、実は、好きだと回答した子どもたちも実は心配なのではないか。好きと言わないと自分が崩れてしまう、そういう内面のざわざわ感を笑顔の子どもから感じられた。自分を強く、元気にしないといけないという強い規範を感じたのである。

私たち大人は、真の意味で無防備に安心できる子どもたちの環境を作っていかなければならない。大人へのメッセージを送ってくれた子どもたちに応えていかなければならない。

2 多様な文化的背景をもつ子ども

実施期間：平成29(2017)年7月

実施場所：対象者の居宅にて実施

実施対象：4人(男2人 女2人 / 小学生1人、中学生1人、高校生2人)
(文化的背景／フィリピン4人)

調査方法：個別面談で実施(通訳あり)。1人20～30分の聴き取り

川崎市子どもの権利委員会による多様な文化的背景をもつ子どもへのヒアリング調査は、今回が5回目である。

本市の外国人住民人口は、平成29(2017)年6月末日現在、37,385人となっており、18歳未満に限ってみると、外国人住民人口は4,009人で、当該年齢人口の1.7%を占めている。

1980年代に入るまでは、本市の外国人住民の多くは韓国・朝鮮籍であったが、さまざまな国から就労や留学、国際結婚など多様な背景や理由で来日する人が増え、その数はこの30年で約3倍に増加した。国際結婚によって子どもが生まれたり、海外から帰国したりするなど、日本国籍であっても外国につながるのある人々も増えている。

本調査は、過去には外国人学校や日本語学習教室において実施したが、今回は対象者の居宅においてヒアリング調査を実施した。

具体的には、(1)子どもの興味・関心、楽しみ、(2)子どもの居場所、(3)子どもの不安、悩み及び相談、(4)子どもの権利条例の認知度、(5)子どもの参加・意見表明、(6)子どもの自己肯定感等、(7)母語・母文化について質問シートを作成し、必要に応じて通訳を介しながら、外国にルーツのある子ども(外国人の母親の子ども等)への個別に聴き取りを行った。これにより、多様な文化的背景をもつ子どもの置かれている状況の一端がうかがえた。

(1) 子どもの興味・関心、楽しみ

最近夢中になっていることや楽しみは何かという質問には、2人から「インターネットのゲーム」という回答があり、そのほかにも「タブレットのゲーム」「音楽を聴いたり、YouTubeを見る」との回答があった。

(2) 子どもの居場所

一番居心地が良い場所はどこか、どうしてそう感じるのかの質問には、3人が「家」と回答し、理由としては「家の中が安全だから」している。また2人が「公園」、1人が「ふれあい館」と回答した。

(3) 子どもの不安、悩み及び相談

ア 不安や悩み

不安に思うこと、悩んでいることは何かという質問には、「テストが心配。国際学習室で勉強をするので勉強がほかの子より遅れてしまう」「学校に居場所がなく、最近学校に行っていない」「学校の勉強が難しい」との回答があった。1人が「特にない」と回答し、理由として「最近は家にいるようにしているから悩み事も少ない」としていた。

イ 相談相手

困ったり、悩んだりしている時は誰かに相談するかという質問には、1人が「友だち」、1人が「先生」と回答した。また2人が「相談しない」と回答した。相談しない理由としては「自分の話はしにくいから」「どうしようか悩んでいるうちに忘れちゃうから」とした。また、親に相談しない理由としては、「自分がやっていないのに自分のせいにされたことがあるから」「親はわからないことが多いから」とした。ただし「母はいつもそばにいるから心強い」とも回答していた。

周りの大人は話を聞いてくれるかという質問には、3人が「先生が聞いてくれる」と回答している。1人は、学校をやめたいと相談にいったところ、将来のことを考えて高校は出たほうがいいとアドバイスされ、学校へ行くと約束した。また、1人は、受験のときに悩んで学校の先生らに相談して、合格することができたとのこと。「母親が聞いてくれない」と回答した1人は、「母は日本語が少ししかわからないし、いつも疲れている」とした。

ウ 相談機関

知っている相談機関についての質問には、全員が1つも知らないと回答したが、2人が「SOSカードは見覚えがある」と回答した。

相談したいと思うかという質問には、2人が「電話がないからできない」、1人が「知らない人には電話できない」と回答した。

(4) 子どもの権利条例の認知度

子どもの権利条例を知っているかという質問には、全員が「知らない」と回答。うち2人は「条例リーフレットが配られたのは覚えている」と回答した。1人は「英語だったら読んでみようかなと思う」と回答した。

(5) 子どもの参加・意見表明

ア 子どもの参加

地域のイベントや行事に参加するかという質問には、1人が「ふれあい館のイベントは参加する」と回答し、理由を「室内で安全だし、知っている人もいるから」としていた。3人が「参加しない」と回答しており、理由を「以前はお祭りとかに行っただけ、集団が好きじゃないし、家に1人でいたほうがいいから」「人がいっぱいいるところが好きじゃないから」としていた。ただし、うち1人は「たまたま知ったら行くかも」としていた。

イ 子どもの意見表明

誰かに言いたいこと、伝えたいことがあるかという質問には、1人が「ある」と回答し、「いじめをする子がいるので、やめてほしいと言いたい」としていた。他はそれぞれ「言いたいことは沢山あるけれど、自分のことはあまりぺらぺら喋らないほうがいい」「親にも言えないことがある。そういうときは1人で泣いている」「日本語ができないので言いにくいときがある」と回答した。

(6) 子どもの自己肯定感等

ア 自己肯定感

自分のことが好きかという質問には、1人は「好き」と回答し、理由を「日本語ができるようになって、日本の友だちが増えたから」としていた。2人が「あまり好きではない」と回答し、理由を「学校で恥ずかしくて発言できないから」としている。1人が「わからない。あまり考えたことがない」と回答した。

親や周りの大人に大切にされていると思うかという質問には、2人が「思う」と回答し、理由として「母親は自分のことを大切に思っていて、そうじゃなければ日本に連れて来ないと思うから」としていた。1人は「あまり思わない」と回答し、「母にいつも怒られる。大切にされていないと思う」としていた。1人は「わからない」と回答した。

友だちに大切にされていると思うかという質問には、2人が「思う」と回答し、「友だちが大好きで、いなくなってしまうから」としていた。1人が「だいたいそう思う」と回答し、「日本人の友だちもフィリピン人の友だちもいて、悪口ばかり言っているが、友だちは好き」としていた。1人は「ふつう」と回答した。

毎日が楽しいかという質問には、2人が「楽しい」と回答し、「友だちが沢山いるから」「最初は友だちがいなかったけど、今は沢山できて、高校に入ってよかった」としていた。2人が「だいたい楽しい」と回答し、「学校の勉強はだるいけど、ぼちぼち楽しい」としていた。

イ 自信のあること、得意なこと

それぞれ「運動会のリレー」「物を作るのが得意」「友だちの悩みを聞くのが上手」「友だちの中では自分が一番小さいけど、携帯ゲームが一番うまいのは自分」と回答した。

ウ 将来の夢

2人が「大学に行きたい」と回答。そのほかに「飛行機のCA」「もしものときのためにシェルターを作りたい」「看護師か先生になりたい」「パイロットになりたい」と回答した。

(7) 母語・母文化

母語や母文化について学ぶ機会があるかという質問について、「母語を学ぶ機会がある」という回答はなかった。1人は「親が教えてくれない」、1人は「タガログ語はまったくわからない」と回答した。母文化については、2人がふれあい館でフィリピンの踊りなどを習ったことがあると回答し、「文化をほかの人に教えたい」「フィリピンに行ってみた

いし、文化を学んでみたい」としていた。また2人が、同じ国の友だちと交流する機会があると回答した。

(8) 川崎市子どもの権利委員会によるまとめ

子どもの居場所について、「公園」と答える子どもが複数いて、大人の見えない場所で集まっていることがうかがえた。また、学校や地域に居場所のない子どもが、家にこもってインターネットに夢中になってしまうなどの状況も推察される。大人が目がある場所、大人との関係が結べるような居場所、特に中学生や高校生の居場所のあり方を考えなくてはならない。

不安や悩んでいることについては、学校の勉強を挙げている子どもが多い。親が勉強を見てくれないため、学校でしか勉強できないという環境にあるケースがあり、学校中での支援の取組はとりわけ重要である。また、無料で利用できる学習サポート教室等が地域にたくさんあることが望ましい。困ったり悩んだりしたときの相談相手について、親が日本語が苦手なため相談できないという状況がある。友だち同士の相談は解決につながらないことが多く、電話相談は外国の子どもにはハードルが高い。周りの大人が気にすれば解決することもあり、学校の先生やスクールカウンセラーが子どもにとっての身近な相談相手となってほしい。

地域との交流については、地域の行事は活発に行われているが、情報が外国人に届きにくいという課題がある。地域の行事に参加することは、日本の文化等を学ぶ良い機会にもなり、地域の行事に参加したがつている子どもは多いので、地域からの積極的な声かけを期待したい。

自己肯定感については、日本語に自信がないと自己肯定感を持ってないという傾向がある。自分や親が外国籍であることを恥ずかしがつて隠そうとすることもあり、自己肯定感を持つことが難しい面がある。そのような子どもは、自分のルーツ（文化など）を人に話したりすることで、自分に自信を持つことができる。母語や母文化を教えることは親の役目ではあり、それを学べる場が地域にあることが望まれる。

3 障がいのある子ども

実施期間：平成29(2017)年7月

実施場所：市内の障害児通所支援事業所

実施対象：4人(中学生1人、高校生3人 / 男4人)

調査方法：個別面談で実施。1人20~25分の聴き取り。冒頭のみ施設職員が同席

川崎市子どもの権利委員会による障がいのある子どもへのヒアリング調査は、今回が3回目である。

平成28(2016)年度の統計では、市内の県立・市立特別支援学校に1,343人の児童生徒が在籍し、また全ての市立小・中学校に設置されている特別支援学級には2,186人の児童生徒が在籍し、いずれも増加の傾向にある。このような状況から、障がいのある子どもの放課後の過ごし方、休日や長期休業中に活動する場所等へのニーズが高まっている。

今回は放課後等デイサービスを実施している障害児通所支援事業所の協力を得て聴き取りをした。調査にあたっては、(1)子どもの興味・関心、楽しみ、(2)子どもの居場所、(3)子どもの不安、悩み及び相談、(4)子どもの権利条例の認知度、(5)子どもの参加・意見表明、(6)子どもの自己肯定感等について、質問シートを作成し、個別に聴き取りを行った。質問にあたっては、冒頭のみ施設職員が同席し、質問内容をゆっくりとやさしい言葉で説明する、無理に言葉を引き出さないようにするなど、子どもの状況を配慮して行った。これにより、障がいのある子どもの置かれている状況の一端がうかがえた。

(1) 子どもの興味・関心、楽しみ

最近夢中になっていること、楽しみにしていることとはという質問には、「読書(伝記物)」「パソコン」「野球をやったり、テレビを見ること。特に高校野球が好き。学校では体育が好きでバスケットボールやサッカーが得意。国語、数学はあまり好きではない」「学校で友だちと遊ぶことが一番楽しい。学校の作業学習でクリーニングをやっている」との回答があった。

(2) 子どもの居場所

最近一番居心地のよい場所はどこかという質問には、「学校。友だちと一緒に遊べるから」「自分の部屋。好きなことができ落ち着くから」「他の放課後等デイサービス施設。同じ学校の小学部の友だちと遊べるから。施設の広さが広い」との回答があった。また、ヒアリングを実施した4人全員が対象施設は安心できると回答した。

(3) 子どもの不安、悩み及び相談

ア 不安や悩み

心配していることや悩んでいることは何かという質問には、「学校の交流体育に参加させてもらえないこと」「学校で怒られることが多いこと」「疲れることが多いこと」との回答が1人からあったが、他の3人については特にないとの回答であった。

イ 不安や悩みの相談相手

疲れているとき、困っているとき、悩んでいるときはどうするか、誰に相談するかという質問には、「困ったときはお母さんに話す」「親に話せないで抱え込んでいる。両親は話を聞いてくれるが『しっかりしなさい。がまんしなさい』と言われ、すべてを出して話せない」「すべてを話せない自分も嫌になることがある」「学校の複数担任の中では女性の先生が話しやすい。いじめられた時は直接先生に訴えるが、すべてをわかってもらふことはできない」「(対象施設の)スタッフに相談する」との回答があった。

ウ 相談機関

相談カードについては、1人から「見覚えがある」との回答があったが、他の3人は「相談カードを見たことがない」との回答があり、さらに4人全員が相談機関を知らず、「相談したことがない」と回答した。もっとも、うち1人から「話を聞いてくれるのであれば、相談したい」との回答もあった。

(4) 子どもの権利条例の認知度

子どもの権利条例については、1人から「(リーフレットを)見たことがある」との回答があったが、内容を知っている人はいなかった。また、子どもの権利があることについて「いいなと思う」との回答があった。

(5) 子どもの参加・意見表明

ア 子どもの参加

地域のお祭りについて、3人から「お祭りは好き」との回答があり、他の1人も「行ったことはないが参加したい」との回答があった。また、1人から「学校のイベントが好き。文化祭は楽しい」との回答があった。

イ 子どもの意見表明

だれかに言いたいこと、伝えたいことはあるかという質問には、「施設のスタッフ」「学校では言えない。施設で言えるかわからない。」との回答があった。

(6) 子どもの自己肯定感等

ア 自己肯定感

自分のことが好きかという質問には「自分の明るいところが好き」「自分のことが好き。好きなことをしているから。」との回答があった一方で、「わからない」との回答が2人からあった。

親や周りのおとな、友だちに大切にされているかという質問には、「大切にされていると思う。家の人や学校の先生、施設のスタッフは助けてくれる」「大切にされていると思う。いろいろなことを教えてくれたり、ごはんを作ってくれたりする。外ではあまり感じない。」との回答があった。

友だちに大切にされているかという質問には「思う。遊んでくれるから。」「思わない。仲の良い友だちがいないから」との回答があった。

毎日が楽しいかという質問には4人全員が「楽しい」と回答し、その理由として「遊ぶことが楽しい。体育が好き。」「家でゆっくりしていると楽しい。勉強が好きなので学校も楽しい。」との回答があった。

イ 自信のあること、得意なこと

得意なこと、将来の夢についての質問には、「サッカー」「本を読むこと、絵を描くこと」「人の名前を覚えること。日本史が得意」との回答があった。

ウ 将来の夢

将来の夢については、「自動車工場で働くこと。車の改造をすること。」「漫画家になること」「清掃の仕事。きれいにするのが好きだから。」との回答があった。

(7) 川崎市子どもの権利委員会によるまとめ

今回ヒアリング調査では、比較的障がいの程度が軽い4人から話を聞くことができた。4人がみな安心できる場所を持ち、それぞれの楽しみや目標を持って生活している様子がうかがえた。

放課後等デイサービスについては、障がいの程度や本人の希望、家族の都合・ニーズ等から多様な形態や特色があることが予想され、その数も増えているようである。そのような放課後デイサービスの特徴を活かして、今後、職員の資質の向上や、子どもの特徴にあった施設を子どもや保護者が探しやすくする等のアクセスの便宜を一層図ることの必要性も感じられた。

4 不登校の子ども

実施期間：平成29(2017)年7月

実施場所：市内フリースペース

実施対象：10人(小学生2人、中学生5人、高校生世代3人 / 男5人 女5人)

調査方法：個別又はグループ面談で実施。各20~30分の聴き取り

川崎市子どもの権利委員会による不登校の子どもへのヒアリング調査は、今回が4回目である。

平成27(2015)年度の不登校についての調査によると、市立小学校に293人、市立中学校に1,003人の不登校の児童生徒がおり、これらの子どもたちへの支援、とくに居場所の確保へ向けた支援が求められている。

ヒアリングに関しては、(1)子どもの興味・関心、楽しみ、(2)子どもの居場所、(3)子どもの不安、悩み及び相談、(4)子どもの権利条例の認知度、(5)子どもの参加・意見表明、(6)子どもの自己肯定感等について、質問シートを作成し、個別もしくは2~3人のグループで聴き取りを行った。市内フリースペース1か所のみという限定的な調査のため川崎市全体の状況とは言えないが、ヒアリングで得られた意見から、不登校の子どもが置かれている状況の一端がうかがえた。

(1) 子どもの興味・関心、楽しみ

最近夢中になっていること、楽しみにしていることはという質問には、ちょうど夏休み前ということもあり、施設に通うメンバーで行く「キャンプ」を挙げる子どもが半数いた。ほか、「みんなでやるバスケットボール」「映画」「ドラマ。フリースペースのスタジオでもやる。」「友だちと遊ぶこと」といった回答があり、子どもによって興味・関心が多岐にわたっていた。

(2) 子どもの居場所

最近、一番居心地のよい場所はどこかという質問には、「自分の家」を挙げる子どもが多かった。「施設(屋上)」を挙げた子どもも複数いて、その理由は「スタッフや友だちがいるから」「いろんな人がいるから」などであった。

(3) 子どもの不安、悩み及び相談

ア 不安や悩み

最近の悩みとしては、「将来の夢や進路、受験」を挙げる子どもが多かった。

イ 相談相手

疲れているとき、困っているとき、悩んでいるときはどうするかという質問には、「親に相談する」子どもがいる一方で、「親には相談しないで友だちに相談する」と答える子どももいた。また、「施設のスタッフや親、友だちに相談しないで、自分で解決する」という子どももいた。

ウ まわりの大人

まわりの大人が自分の話を聞いてくれるかという質問には、「聞いてくれる」がほとんどだった。施設のスタッフも気にかけてくれているようで、気軽に相談ができる雰囲気が感じられた。

エ 相談機関

知っている相談機関は何かという質問には、「チャイルドライン」「総合教育センター」を挙げる子どもが多かった。

オ 相談カード

黄色の相談カードの配布については、知っている子どもは4人だった。ただ配られただけで、説明を受けた記憶はなかった。

(4) 子どもの権利条例の認知度

子どもの権利条例については、「学校の授業で学んだ」が2人で、他は「施設内にポスターが掲示されているのを見て知った」だった。

条例のパンフレットを見せて7つの権利を示し興味があるものを尋ねたところ、「安心して生きる権利」「差別されない権利」「自分で決める権利」などが挙げられた。

(5) 子どもの参加・意見表明

ア 子どもの参加

地域イベント(お祭)に参加したことがある子どもがほとんどだったが、参加したことが無い子どももいた。参加したことがある子どもは、「和太鼓をたたいた」「やきそばの売り子」「うどん屋を手伝った」「子ども会の祭を今でも手伝っている」など、記憶に残っているようであった。

イ 言いたいこと

「言いたいのに言えないことはない」と答えた子どもがほとんどであった。

ウ 子どもの意見表明

日常における意見表明の機会についての質問には、「施設内で定期的に利用者によるミーティングがある」「そのミーティングでは自分たちでルールを決め、そこで決まったルールを大切にしている」という回答があった。実際に、提案した内容が実現した経験が複数上がり、意見表明することの意義を感じているようだった。

(6) 子どもの自己肯定感等

ア 自己肯定感

自分のことが好きかという質問には、「好き」が3人、「だいたい好き」が5人、「きらい」が1人だった。また、親や友だちに大事にされているかについては、「だいたいそう思う」が9人だった。また、「施設の皆で遊んでいるとき」を「楽しいとき」と答える子どもが多かった。

イ 自信のあること、得意なこと

自分の自信のあることは何かという質問には、「リフティング」「鉄棒」「絵を描くこと」「バスケットボール」「サッカー」などが即座に挙げられた。

「特になが、ベースが得意だと言えるようになりたい」「今まで家において外に出ることが無かったが、外に出れるようになったこと」と答える子どもがいて、施設に行くことで、自信を持てるようになっていくことがうかがえた。

ウ 将来の夢

アーティスト、建築家、マダガスカルに行きたい、音楽か舞台の仕事がしたい、絵を描く仕事をしたい、この施設で働きたいなど、それぞれ描いている夢があった。

(7) 川崎市子どもの権利委員会によるまとめ

今回のヒアリングにおいては、あらかじめ対象者が決まっているわけではなく、当日、その施設に来所した子どもに交渉をしてヒアリングを行った。前回のヒアリング時は、夏休み期間に入ってからのヒアリングだったためか、来所していた子どもも少なく、4人という限られた人数にしかヒアリングできなかった。そこで今回は、夏休み前の7月上旬に実施したこともあり、10人の子どもにヒアリングを行うことができた。

ただ、今回は、10人中6人は2人組でのヒアリングとなったため、同席している友だちの回答を気にしたり、その回答に反応を示すなど、子ども自身が本音で答えられる環境だったかは課題となっている。また、2か所に分かれてヒアリングを行ったが、スタッフや他の子どもに近い部屋でのヒアリングと、離れた場所でのヒアリングとでは、子ども自身の反応も異なっていたようである。

とはいえ、「自分らしくいられる場所」という、その施設における安心感、居心地の良さを感じる中でのヒアリングを行うことができ、どの子どもも落ち着いて話をしてくれた。こうした施設があるからこそ、毎日のように通うことができているようで、他人との触れ合いやコミュニケーションを大事にしていることがうかがえた。

5 乳幼児とその親

実施期間：平成29(2017)年7月

実施場所：地域子育て支援センター

実施対象：7人(0歳～1歳児の親、20代2人、30代4人、40代1人 / 女7人)

調査方法：個別面談で実施。1人20～30分の聴き取り

川崎市子どもの権利委員会による乳幼児の親へのヒアリング調査は、今回が2回目である。平成28年における市内の未就学児の人口は約8万人で、増加の傾向にある。一方で、児童相談所における子どもの虐待相談・通告件数のうち、乳幼児へのものは47.2%と半数近くを占めており、乳幼児の権利保障は大きな課題となっている。

就学前の子どもと親と一緒に遊び、過ごす場所として、市内約46か所に地域子育て支援センターが設置されているが、今回は地域子育て支援センター1箇所の協力を得て、乳幼児の親へのヒアリング調査を実施した。調査の相手方が子ども本人ではなく、その親であるため、質問の内容は他の分野の質問から大きく変更し、(1)子どもが夢中になっていること・遊び、(2)子育てに関する意識、(3)子育てに必要な養育支援、(4)子どもの権利条例の認知度、(5)親等の自己肯定感等について質問シートを作成した。

乳幼児の子どもと一緒にの場所でヒアリングを行ったため、集中することが難しい状況ではあったが、乳幼児をとりまく状況や、親の子育てへの意識等について一端をうかがうことができた。

(1) 子どもが夢中になっていること・遊び

子どもが夢中になっていることや遊びについての質問には、「スイミングスクールに通っているのをそれを楽しみにしている」「公園など外で遊ぶこと」「大人の持っているもの、リモコン、スマホ等に興味を示す」「ミッキーのアニメ」「テレビを見ながら踊ること」「電車」「何でも登れるものに登る」等の回答があった。

(2) 子育てに関する意識

子育てで楽しいことや、不安や心配、困っていることについての質問には、「いままでに出来なかったことが出来るようになった時」「何をやっても可愛い、泣いても可愛い、日々感謝」「子どもとコミュニケーションを取れたとき」「ディズニーランドも子どもと行くと見方が変わって楽しい」等子育てに楽しさを感じていた反面、「断乳の時期」「子どもに集団行動をさせる時期」等子どもの成長とともに切り換えの時期の不安も感じていた。

親との時代の違いについては、お互いに時代が違うと考えることにして、うまくやっているとの回答だった。

(3) 子育てに必要な養育支援

子育てを手伝ってくれる人についての質問には、「義父母」「夫」「自分の両親」等が挙げられたが、義父母については気を使う等の難点もあげられた。

「美容院等のちょっとした用事」や「兄弟が具合悪くて病院に連れていきたい時」等、急でもちょっと預かってもらえるところがほしい、との回答もあった。

「この場所が近所で同じ年代の子どもを持つ親と知り合える場になっている」「担当の方に育児相談をする。愚痴を聞いてもらうこともある」等、有効利用出来ているとの回答もあった。

(4) 子どもの権利条例の認知度

母子健康手帳や子育てガイドブックにある条例のページを見たことがあるかの質問には「見たことがない」、パンフレットについては「学生時代にパンフレットを配られた記憶はある」との回答があった。

子どもの権利については、「当たり前の事なのに条例にしなくてはいけない時代なのか」との疑問も上がった。

(5) 親等の自己肯定感等

自分のことが好きかという質問には、「好き」と答えた方は、「子どもが好きではなかったが生んでみて、子育てが楽しい」との回答があった。しかし、「好きではない」と答える人が多く、子育てで「すぐ怒ってしまったり、イライラしてしまう自分が嫌だ」「自分にちゃんと子育てが出来るのかなど、ネガティブに考えてしまう」等の回答があった。

(6) 川崎市子どもの権利委員会によるまとめ

まだ年齢的に集団で遊べないの子どもたちだったが、ジャングルジムや滑り台等の遊具等もあり、それぞれがブロックやおままごとセット、電車等で遊んでおり、ヒアリング当日は雨の天気だったが、元気で楽しそうだった。

すべてが見渡せる部屋で、お母さん同士も会話しながら子どもを見られるので、幼稚園選びや習い事の情報や、子どもの成長の悩み等話している声も聞かれた。

お母さん達にとってのママ友づくりに役立っており、子育てに不安を抱えている親への支援にもつながると考えられる。

母子健康手帳や子育てガイドブックにある権利条例のページについては前回と同じで、「見たことがない」という結果であり、これらを交付・配布する時に条例の説明を加えること、親子が集う場で条例の説明を実施する必要性が感じられた。

6 その他（小学生・中学生）

実施期間：平成29（2017）年7月

実施場所：（小学生）こども文化センター

（中学生）地域の寺子屋

実施対象：（小学生）6人（男5人、女1人）

（中学生）15人（男7人、女8人）

調査方法：2～4人のグループで実施。1グループ20～30分の聴き取り

本ヒアリング調査では、個別の支援を必要とする子どもたちを対象にして行うものであるが、今回の調査では、こども文化センターと地域の寺子屋を利用する小中学生への聞き取りを行った。その目的としては、個別の支援を必要とする子どもとの比較対象とすること、地域での居場所となっている施設等の実態を把握することにある。

今回調査を実施したこども文化センターは、児童福祉法に規定する「児童厚生施設」で、子育て支援、子どもの居場所づくりを行うとともに、多世代が交流しながら主体的に活動できる地域の拠点施設である。地域の寺子屋は、地域人材の知識と経験を活かして、地域ぐるみで子どもの学習や体験活動をサポートし、多世代で学ぶ生涯学習の拠点となる場であり、平成29年度末時点で38か所で開講している。

これらの場で行われたヒアリング調査は、（1）子どもの興味・関心、楽しみ、（2）子どもの居場所、（3）子どもの不安、悩み及び相談、（4）子どもの権利条例の認知度、（5）子どもの参加、（6）子どもの自己肯定感等について、質問シートを作成し、2～4人のグループで聞き取りを行った。

I 小学生

（1）子どもの興味・関心、楽しみ

最近夢中になっていること、楽しみにしていることについての質問に対しては、「ドッジボール」「野球」「サッカー」「バスケットボール」「テニス」と、スポーツが多かった中、「いとこと星を見ること」と答えた子どももいた。

（2）子どもの居場所

ア こども文化センターについて

よく利用するかという質問に対しては、全員「たまにしか来ない」だった。来館の動機については、「ゲームが出来るから」「友だちと約束していなくても楽しく遊べるから」があった。他に「雨でプールに入れなから」という子どももいた。施設のすぐそばにプールがあるが、この日は雨だったためここに来たそう。

来てよかったことについては、「友だちが増えること」という回答だった。

スタッフと何を話すかについては、「職員の人とはあまり話さない」「来たときはいつも話す」と、子どもによって関わり方が分かれている様子がうかがえた。いつも話すという子どもも「友だちが来てるかどうかを聞く」というのが話す内容だった。

イ 居心地のよい場所について

最近、一番居心地がよい場所はどこか、どうしてそう感じるかという質問に対しては、「自分の家」「いとこの家」「友だちの家」があり、他に「畑があるから、おじいちゃんの家」「親からがみがみ言われなから、こども文化センター」と答えた子どももいた。日常生活の中で、家に居づらい状況の時の居場所になっているようだ。

(3) 子どもの不安、悩み及び相談

ア 不安や悩み

心配していることや悩んでいることについての質問に対しては、「勉強ができないこと」「スイミングでゴーグルを忘れてしまう」があった。他に「9月に引っ越すこと。親から言われたときは泣いた」と答えた子どもがいた。7月の末に行ったヒアリングだが、夏休みが終わったら、友だちがいる川崎を離れなければならないことが寂しいと話していた。父親の仕事の関係での引っ越しのようだが、「お父さんが、一か月に一回は川崎に泊まりに来ると言ってくれてる」と話していた。また、その場にいた友だちに「学校の先生が言うまで、引っ越しのこと誰にも言わないでね」と頼んでいた。

イ 相談相手

困っているとき、悩んでいるときはどうしているか、どこかに、誰かに相談するかという質問に対しては、「両親」「親友」「大人（父母、おばあちゃん）」「友だち」という回答だった。

(4) 子どもの権利条例の認知度

子どもの権利条例を知っているかという質問に対しては、「知っている。学校で配られた」「知らない。配られていない」と分かれた。

(5) 子どもの参加

地域のイベントや行事への参加についての質問に対しては、「お祭りで神輿を担いだことがある」や「サマーフェスタのバザーでお店を出す。ラムネを売ったりする。ただお祭りに行くより楽しい」があった。“参加”をしていて、それが楽しいと感じているようだ。

(6) 子どもの自己肯定感等

ア 自己肯定感

自分のことが好きかという質問に対しては、「好き」「だいたい好き」と、ほとんどの

子どもが答えた。

親や周りの大人に大切にされているかに対しては、「思う」「だいたいそう思う」とほとんどの子どもが答えたが、一人だけ「そう思わない」と答えた。

友だちに大切にされているかに対しては、前の質問に対しての結果と同じで、「そう思わない」と答えたのは同じ子どもだった。

毎日が楽しいかに対しては、「だいたい楽しい」「ゲームが出来るから、だいたい楽しい」がほとんどだったが、“だいたい”の理由としては「お母さんに毎日怒られるから」だった。

イ 自信のあること、得意なこと

自信のあること、うまくできること、得意なことについての質問に対しては、「国語」「算数」「社会」「理科」「工作」「音楽」「野球」「サッカー」「水泳」「バスケットボール」「テニス」「体育」と、ほとんどの教科や習い事が全員からあがり、それぞれが得意なことを持っていることが分かった。

ウ 将来の夢

将来の夢については、「バスケットボールの選手」「プロ野球の選手（ソフトバンク）」「テニスの選手」「ゲームを作る人」「ユーチューバー」が挙がった。夢を聞かれてすぐに答える子どもが多かった。

(7) 子どもの権利委員会によるまとめ

今回のヒアリングは、事前に対象者を決めていたのではなく、当日こども文化センターに来館した子どもに、話を聞かせてもらいたいことを伝えて行った。友だちと遊んでいる途中に急に大人からのヒアリングが始まった訳だが、グループだったせいか、あまり緊張した様子もなく答えてくれた。

こども文化センターにはたまにしか来ないという回答が多かったが、良さとして、友だちが増える、友だちと約束しなくても楽しく遊べる、親からがみがみ言われなから等があり、いつでも自由に、一人でも気楽に来て楽しく遊べる場所、そしていい意味での逃げ場、居場所のひとつになっているようだ。

自分のことが好きと思えて、周りからも大切にされていると感じている子どもは多かった。自信のあることや得意なこともたくさん持って、積極的にそして得意げに話してくれた。将来の夢もそれぞれが持っていて明るく楽しげに教えてくれた。地域のイベントや行事にも参加している子どもが多かった。神輿を担いだり、バザーで出店したりしている。ただお祭りに行くより楽しいという感想を持っていて、主体的に関わることの心地良さを感じられているようだ。

こういう気持ちは、周りから大切にされている安心感によって自信も持っていることが大きいように思う。だから、様々なことに積極的になれるのではないかと思う。それだけ周りの関わり方、特に大人がどう関わるかによって、子どもの自己肯定感がどれだけのものになるかに大きく影響しているように思う。

それでも中には、親や周りの大人、友だちから大切にされていると思えていない子どももいた。その子どもは答える時も静かで声も小さかった。

様々な思いを持っている子どもたちが集まるこども文化センター、その場が多くの子どもたちにとって、心地良い居場所となり続けるためにも、地域の大人やこども文化センター職員が、子どもたちを大切に思っていることを、子どもにしっかり感じてもらえるような関わりを続けていく必要があると考える。

II 中学生

今回中学生については合計5グループ15人からのヒアリングを行った。冒頭で書かれている通り「地域の寺子屋」は市内38か所（小学校28か所、中学校2か所）で開講しているが、それぞれ独自の形態・運営をしている。今回調査した中学校で開催されている地域の寺子屋は、学校と地域との連携もはかられていて、多い時には数十名の参加者がある。参加している生徒も、「図書館より集中できる」の言葉通り、補習的な意味合いより自主学习・グループ学習をする中で、わからない所を聞くといった利用の仕方をしていた。ヒアリング対象者の中には、この寺子屋に来ながら、塾にも行っている生徒も数人いた。

(1) 子どもの興味・関心、楽しみ

最近、夢中になっていること、楽しみにしていることは何かとの質問に対しては、「漫画」3人、「スマホ」2人、「アニメ」「サッカー」「自転車で遠くに行く」などの回答のほか、「特になし、早く学校から帰りたい」も2人いた（同グループ）。

(2) 子どもの居場所

ア 地域の寺子屋について

全員が「居心地がよい」と回答しており、「いつでも（わからない所が）聞ける」「図書館より集中できる。静かすぎないのがいい」「友だちとおしゃべりできて落ち着く」といった理由をあげていた。

イ 居心地のよい場所について

最近、一番居心地がよい場所はどこか、どうしてそう感じるのかとの質問に対しては、「自分の部屋」4人、「自分の家」7人と、自分の家が「落ち着く」との回答が多かった。その他、「塾」（先生や友だちがいいから、涼しいから）、「学校の教室」（落ち着くから）等の回答があった。

(3) 子どもの不安、悩み及び相談

ア 不安や悩み

心配していることや悩んでいることについての質問に対しては、3年生は「高校入試や進路での悩み」が5人、「高校に入れなかったらどうしよう。できれば大学にも行きたい」

「テストの結果が気になる」などの回答があった。そのほか、「部活動での人間関係」が2人、「部活動での疲労」が3人、「学校・授業が疲れる」が2人だった。

イ 相談相手

困っているとき、悩んでいるときはどうしているか、どこか誰かに相談するかとの質問には、「母親」2人、「兄弟」1人、「友だち」2人であった。勉強についての相談は、「塾の先生」3人、「学校の先生」2人、「寺子屋の先生」1人で、「ゲームのことはゲーマーの父親に聞く」という回答もあった。

(4) 子どもの権利条例

子どもの権利条例を知っているか、どう思ったかの質問には、「知っている」11人、「知らない」4人、「相談カード『ひとりで悩まないで』」が配られた。今は相談することがないので使わないが、カードがあるのはいいことだと思う」「学べる権利がある。子どもの権利がなかったら自分がどうなってるかわからない」との意見があった。

(5) 子どもの参加

ア 子どもの参加

地域のイベントや行事に参加するかの質問には、「お祭りに参加する」が7人、そのうち2人から「お祭りで美味しいものを食べる」という回答があった。子ども会に入っている子どもの参加の仕方は、おみこしを担いだり売店をするなど、能動的な参加になっている。

イ 子どもの意見表明

誰かに言いたいこと、伝えたいことがあるかの質問には、「特にない」「思い浮かばない」を含め「ない」が9人。「父への不満は言えないので、母に言う」が2人、「友だちとは面白かったこととかの普通の会話しかできない。思ったことを全部話せるわけではない」の意見もあった。

(6) 子どもの自己肯定感等

ア 自己肯定感

自己肯定感については①自分が好きか②親や周りの大人に大切にされているか③友達に大切にされているか④毎日が楽しいかの質問を行った。

①については「好き」6人で、理由として「他の人と入れ替わることができないから」「さぼっちゃうこともあるけど最終的には頑張るから」が挙げられた。「好きでない」「あまり好きでない」8人で、理由として「周りの人と比較してしまうから」「運動神経がないから」が挙げられた。②については、12人が大切にされていると感じていて、理由として「好きなことをやらせてもらえているから」「ご飯をつくってもらったりしているから」「信頼されている」が挙げられた。③については、「話を聞いてくれる」など9人が大切にされていると感じているが、「いいときもあれば悪口を言われることもある」「友

だちからどう思われているかわからない」などの回答もあった。④については、10人が「楽しい」と回答。「友だちがいいから」など友だちとの良い関係が理由の大半を占めていた。「楽しくない」には「親から勉強を強制されてつらい」という回答があった。

イ 自信のあること、得意なこと

自信のあること、うまくできること、得意なことの質問には、「マンガが早く読める」、「カゼをひかない」、「絵がうまい」3人、「書初めがうまい」、「テニスがうまい」2人、「寺子屋で数学が伸びた」、「変な声を出すこと、人を笑わせること」、「ピアノ」3人、歌うこと「サッカー」、「本を読むこと」、「体が柔らかいこと」など、色々な回答が寄せられた。

ウ 将来の夢

将来の夢については、「公務員」、「看護師」、「スタバでアルバイトをしてからカフェを開きたい」の具体的なものから、「ホワイトな仕事がいい」「干上がらないように働いていきたい」「ゆったりと暮らすこと」「安定した生活」「運動が得意なので、いかせたら」まで、多様な意見が出た。3人から「まず大学に行きたい」という回答があった。

(7) 川崎市子どもの権利委員会によるまとめ

居場所については、対象者が安定した家庭環境に暮らしていると感じられ、自分の部屋も持っていることが推察される。そうした環境で、ゆったりと過ごす時間を大切にしている様子も伝わってきた。それとともに、友だちと過ごす時間も気持ちの上での居場所として大切にしている様子も伝わってきた。地域の寺子屋にも部活の始まり・終わりの時間的な流れもあると思うが、部活の友だち同士で参加しているケースが多い。中学生の場合は、人間関係においても部活の占める割合が多いと感じられた。また、学校の授業、部活、塾、習いごとと苦痛とまではいかないが「忙しい」と感じている気持ちも伝わってきた。

地域との関わりについては、子ども会などの果たす役割の大きさを再認識するとともに、近年子ども会の組織率が減少している中で、何らかの対応が必要であろう。親や周りの大人に大切にされているかの質問で、生徒たちの頭には親は浮かぶが周囲の大人のイメージ、昔で言えば「隣のおっちゃん・おばちゃん」は浮かんでこない状況があると思われる。子どもたちの「忙しさ」の背景への根本的な解決策とともに、この地域の寺子屋を含めた地域からの取組が一層進むことを期待したい。